

<辛口時評>

日本モデルを再構築できるか

ここ数年、私は年二、三回のペースで東アジアを歩いている。主に KSP(かながわサイエンスパーク)の経験とノウハウの講義、東アジアサイエンスパーク連合の会議、地域開発戦略の共同研究、大学での講義などのためである。これらの旅を通して痛切に感じていることがいくつもあるが、ここでは次の三点を挙げてみたい。

第一は、日本の存在感が年々希薄になっていることである。かつて東アジアのどこでも感じられた「ルックイースト」「日本に学べ」の熱気は、今やほとんどない。代わって存在感を高めているのが米国と中国である。

なぜ日本の存在感が薄れてきたのか。いうまでもなく第一は、長期低迷する日本経済や日本的経営への信頼感の低下である。さらに、ポスト冷戦期の国家戦略なかんづく対アジア戦略の不透明さ、歴史認識の曖昧(あいまい)さ、政治の混迷、相次ぐ霞ヶ関スキャンダルや原発事故の発生などによる官僚一流、技術一流神話の崩壊、動揺などである。

アジアで唯一の先進国であり、世界第二の経済大国になった日本モデルへの尊敬と信頼が1990年代の「失われた十年」の間に、ほぼ失われてしまったようだ。

第二は、日本に比べ、彼らの仕事ぶりがスピード感に満ちていることだ。例えば KSP 社長時代、これらの国に招かれ経験やノウハウを講義して歩いたのは数年前のことであるが、韓国では一昨年特別立法でサイエンスパーク建設が決まり、企図20カ所の計画のうち6カ所の建設が始まっている。一部は仮施設で稼働しているが、その一つ大邱テクノパークのインキュベータではすでに115社のベンチャーが生まれており、うち40社は近隣の3大学が生んだもので、4社が上場を果たすなど、全国でベンチャーブームが起きている。台湾でもこの3年半でインキュベータがゼロから55に急増し、年間500社のベンチャーを生み出す体制をつくった。中国の高新技术産業園区は全国で53カ所と数は少ないが1カ所20ないし40平方キロと広大で、これまでの外資系ハイテク企業の誘致から自力創業へ重点を移し始めており、今春、瀋陽に中国初のインキュベータが東洋一の規模でスタートする(本紙昨年12月12日参照)。ちなみに中国ではこの数年で大学発のベンチャーが7000社を超えている。

KSP は過去10年かけて120社のベンチャーを育て、4000人の研究者・技術者が集う日本一のサイエンスパークに成長し、これまで東アジアのサイエンスパークの先進モデル、成功事例とみなされてきたが、今や量、質ともに KSP を超えるものが東アジアに続々誕生するのを見て、喜び

と共に複雑な心境になる。日本のサイエンスパークは米国に大きく引き離されている上に、今や東アジアからも急速に追い上げられているからである。

第三に、これらの国々のリーダー層は日本離れを起こしている一方で、日本がもう一度新しいモデルを創(つく)ることに、まだ期待をつないでくれていることである。韓国のある国立大学の総長と懇談した折、別れ際に「私たちはアメリカモデルに惹(ひ)かれつつも、これでいいとは思っていない。欧州モデルにも距離を感じる。日本にもう一度インパクトのあるモデルを構築してほしいのだが、日本の現状にはいら立ちを覚える」と内心を吐露してくれた。21世紀に向けた私たちの大きな課題は、こうしたアジアの内なる声にどうこたえていくかである。そのためには90年代を「失われた10年」にせず、モデル再構築への「試行錯誤の10年」とするよう最大限に教訓を引き出していくことである。そしてこのモデルは単なる経済モデルではなく、文明論的洞察に立ち、かつ政治も文化も環境もふくめた一つの社会モデルでなければならない。新しい日本モデルの構築にあたって、私たちも神奈川モデルの創造によって貢献していきたいものである。